
美しい月の夜に...。

いちご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しい月の夜に…。

【NZコード】

N6329Y

【作者名】

いちじ

【あらすじ】

「綺麗な月ね…。」

人間界と地上界。

地上界の天才月騎士ムーンナイトと呼ばれる美月みつきは、人間ではなかつた。

地上界に生まれる月騎士は、人間の人生を決める重要な存在だった。

心を闇に封印された美月の前に、次々と敵が現れる。

遠い昔、人と人の間に生まれた憎しみ。

生まれてきた意味を探して、最期に美月が選んだ答えとは……？

人間界の夜

美しい月の夜。

街は暗闇に包まれ、人間達の気配は、段々と消えていく…。

そんな人間界を、高い塔の上から見下ろす一人の美しい少女がいた。

彼女の名前は、かざまい
みつき風舞美月。

ブラウンの長く美しい髪を持ち、ゴールドの大きな瞳は、この世界の暗闇を映していた。

「美月～、そろそろ地上界に帰ろうよお。」

彼女が座っている隣に、可愛らしい顔の10歳程の少年が不機嫌そうに立っている。

彼の名前は、鬼百輝瞳。

「輝瞳…さつきからそればっかりね。うるさいわよ…。今話しかけ

ないでよね。考え方をしているんだから。」

すると、輝瞳と呼ばれる少年は、一つ盛大な溜め息をついて大声で
こう言った。

「バカ美月！人間界に行ってるって上層部にバレたらどうするんだ
よ。僕ら殺されちゃうよー！」

自分の身の危険を感じる輝瞳は、徐々に顔色が悪くなっていく。

「輝瞳。大丈夫よ、安心なさい。私の才能溢れる能力で、地上界の
時を止めてるから。」

ウインクをしながら白慢気に言つ美月に、輝瞳は呆れている。

「まったく！今の美月の力じゃ、あの巨大な地上界の時を止める力
はないよ。」

第一、そんなこと、神様だつて出来やしないぞ。

「ふん。何よ…、可愛くないわね。そんなにここが嫌なら、貴方一

人で帰ればどう？あたしは、ここに残るわ。」

輝瞳の言葉でますます不機嫌になつていく美月。

「おーおー、変な冗談言つなつて。お前、ますます性格悪くなつてるよ。」

暫く一人が喧嘩していると…

「…」「…」。

「しつ！何か聞こえない？私達以外に誰かいる…。」

規則正しい足音は徐々に近付いてくる。

「駄目だ…。バレたんだよ。もう僕達はお仕舞いだ。」

「バカ！まだわからないじゃない。一応、武器を構えて…。」

二人は身構え、それぞれ手に短剣を握る。

すると、二人の前に黒い渦が現れ、それは人影になつていく。

「はあ……。お前達、そんな小さな武器でこの俺を殺せると思つか
？」

突然現れた彼の名前は、藤真天空とうま かなた。

「天空！…」

「げつ！…」

彼は、スーツを着た、美形の青年である。

「まったく、お前達には呆れるな。輝瞳！美月の監視を任せられてい
たはずじゃないのか？お前の仕事は何だ？」

「ごめんなさい、天空。僕も一応止めたんだけど、美月が頑固だ
から。

でも、少しでも美月のためになつたらと思つて…。」

天空に怒られて落ち込む輝瞳。

一方で、無関心の美月。

「美月！お前にも怒ってるんだ。人間界に無断で行くことは、禁止されているはずだろ？？」

「そうだったわね。でもこれは、仕事の下見よ。どの人間があたしに相応しいか、この目で確かめたくて。」

反省する気がない美月を見て、溜め息をつく天空。

「お前が担当の人間を決めるんじゃないだろ。担当を決めるのは、地上界の上層部だ。」

「うるさいわね。あたしの気も知らないで……」

あまりにも激しい二人の喧嘩に恐怖を感じた輝瞳。

「おい、二人共！こんな所で喧嘩は止めようよ。こんなことしてる間に時間が過ぎてくだろ……。」

人間界に行つただけで、死ぬなんて御免だ。」

すると、輝瞳の必死な様子が伝わったのか、一人は一旦、大人しくなった。

「安心しろ。上層部にはうまく誤魔化しておいたから。でも、次にルールを破つたら、命は無いと思え。」

「そつか…ありがと…。天空は、やっぱりすごいや。」

輝瞳の顔はパアと明るくなり、命の恩人を見るような目で天空を見つめた。

それでも、相変わらずそっぽを向いたままの美月。

「しようがないな。考え方してたんだろう? そういう時間も必要だもんな。」

そつ言つて美月の横に座る天空。

「え……。」

天空は一コラと笑つ。

「何よ…こきなり。じゃあ、静かにしてよー。」

あ、あたしが立ち上がつたら、もう帰るつて意味だからね…！」

美月の素直じやない可愛らしい所に、天空と輝瞳は、内緒で田を見合せ笑つていた。

地上界の屋敷（前書き）

美月達は、冬の人間界から地上界に戻ってきます。

まだ夜が明けていない地上界で、美月と輝瞳は、天空の屋敷にお邪魔します。

地上界の屋敷

冬の地上界。

人間界と見た目は同じでも、何かが違う気がした。

「お帰りなさいませ、『ご主人様。…美月様のお部屋もきちんと』」用意いたしております。」

地上界でも有名な豪邸のメイドが出迎えに来た。

「ああ、助かるよ。ちなみに、追加でこの子もいるんだが。」

天空の背中におぶられた輝瞳は、可愛らしい寝顔をしていた。

メイドは、チラッと輝瞳を見て、「かしこまりました。彼のお部屋も只今ご用意いたします。」と無表情に言った。

「結構よ。輝瞳は私の部屋で寝かせるわ。離れたくないもの。」

美月は、不安そうな顔でそんなことを言った。

「了解。……そういうことだから、やつぱりこよ。すまない。」

「かしこまりました。」

動作は、ロボットのよう完全璧だった。

この屋敷のメイドは、感情とこゝもののが無い。

案内された部屋に入ると、美月は、無駄に広い空間が気に入らなかつた。

「疲れただる。明日は学校だから、早く寝た方がいい。輝瞳は、ベッドで寝かせるけど、美月はどうある?」

輝瞳を大きなベッドに寝かせながら尋ねてきた。

「隣に寝るわ。…後は、自分でやるから。」

もう一人にしてほしい、とでも言ひよつに静かに眠りにつく美月。

天空は、しばらくこの部屋でティータイムを楽しんでいた。

すると、小さな寝息が聞こえてきた。

「やつと眠つたか…本当に前は、いつも俺に心配をかける…。」

美月が眠るベッドに腰をかけ、額に手をかざした。

すると、天空の脳裏に美月の隠された想いが刻まれていく。

天空は、他人の考えたことかがわかる能力に優れています。

一人残された美月。

お母様、お父様。

どうして、私を残して死んじゃったの。

辛い訓練は、もう嫌だ……。

「お前は、地上界でエリートと呼ばれる風舞家に生まれたんだ。

当然、月騎士の訓練を受けなければならない。」

上層部は、そりやつていつもあたしを閉じ込めよいつある…。

「あれ、風舞美月じゃない…行」行」。怖いよ、あの子。」

離れていく人。

「風舞家の娘の様子は…？」

「まだ若干の感情が残っているようだ…。早く、感情を忘れさせなければな。ロボットに優しい心など、必要ないだろ？」

「風舞美月は、我々の誇りだ。武器として最強に育った時、地上界は更なる革命を起こすだろ？」

みんなあたしを利用している。

心が壊れてすべてが、思い出さえも無くなってしまう。

いつか、お母様とお父様も思い出せなくなる。

どんどん感情を忘れていいやつ。

暗闇の中に、一人だけポツンと立っている悲しい顔をした美月がいた。

「やつぱりな……。」

美月の心を見た天空は、先程の美月の様子が理解出来た。

「可哀想に……。辛いだろ、誰にも言えないで。」

まだほんの少し幼さが残る可愛らしい寝顔を見つめて、溜め息をつく。

「…おい、天空。人の記憶を勝手に見るなって…。」

天空は突然、隣から発せられた声に驚いた。

「輝瞳、起きていたのか。」

彼は、ベッドに横たわりながら一人の様子をじつと見ていたらしい。

「だつて、目覚めちゃつてさ。ねえねえ、美月はどうだつた？」

不安そうな輝瞳。

「どうやら、まだ人間のような心が残つているらしい。」

「えー・本当かーー？」

「静かにー。」

天空は、大きな声を出した輝瞳の口を塞ぐ。

「美月が起きてしまうだろ？」

すると、輝瞳は小さな声で言つた。

「『めんなさい』でも、嬉しくてつい。もう駄目かと思つていたから…。」

悲しそうな顔でベッドから起き上がる輝瞳。

「美月、突然人間界に行きたいって言つたんだ。どんな感情が残つていたの？」

「ああ…苦しいとか辛いとか、悲しいとか、人間でいつたらそんな感じかな。」

「やっぱり明るい感情じゃないね…。でも、残っているだけマシだよ。もし、美月が感情を無くしたら、ただの従順ロボットだもんな。」

「だがな…」

天空は、何かに引っ掛けついていた。

「どうしたの…？天空。」

喜んでいた輝瞳に対し、気まずそつそつと話した。

「いや…それが…。美月は、記憶喪失になりかけていたんだ。いつか…いや、もうすぐ心だけでなく、記憶さえも無くなるだろ。」

残っていると言つても、ほんのわずかなものだしな。」

「そんな…それじゃあ美月が…、美月の両親が可哀想だ！一人は、美月のために死んだのに…。」

「二人とも、どうかしたの…？」

輝瞳の声で目を覚ました美月は、一人に視線を向けた。

「ああ、起こしてしまって悪かったな。もう少し、休んでいいよ。」

輝瞳は、なんだか美月の顔が見れなくて、うつ向いている。

美月の顔を見たら泣こむやつもん。

「輝瞳…どうかしたの？ 具合でも悪いの……？」

その言葉に輝瞳は驚いて涙が出てしまった。

美月は、まだ優しい心を無くしてなんかいない！

「なんでもない。ちよつと顔を洗つてくるよ。」

そう言つて輝瞳は、美月から逃げるように部屋から出でていった。

「何よ、あれ。天空…！ もしかしてリクを叱つていたんじゃないでしょうか？」

あたしが無理やり人間界に連れていったから…。

「そんなわけないだろ？ あんな心の優しい子を叱るはずがない。」

あり得ない…とでも言ひよくな表情をした。

「やう。まあ、いいわ。とにかく貴方、なぜここに…やつを、出で

「 いけと言つたわ。」

「 嘘をつけ。雰囲気だけ漂わせただけで、言葉にはしていないだろうが。

言葉にしなきや、相手に伝わらないこともある。

何か、俺に言いたい」とはないの?」

一瞬美月は驚いたような顔をしたが、すぐにいつもの顔に戻った。

「いいえ。何もないわ。天空は他人でしょ。あたしのことなんてどうだっていいじゃない!早く、出ていいで。」

「わかった。だけど、美月。」

天空は、ベッドに座る美月と田線を同じにして真剣な顔で言った。

「お前のことをどうでもこいと思つた」となんて、一度もない。

俺にとって、美月と、美月のお母さん、お父さんは大切な人なんだ。

予想外の天空の言葉に、どう反応したらいいかわからなかつた。

「明日、学園で待つてるよ。今日は、今から仕事で、ここを留守にするから。必要なものがあつたら、そつきのメイドに頼むといい。」

一方的だつたが、美月は、「わかつたわ。」とだけ返事をした。

「じゃあ、また明日。まだ夜が明けていないから、寝てろよ。」

そう言って天空は、手を振りかざし、一瞬で姿を消した。

部屋のドアの隙間から少しだけ見える、小さな人影。

「輝瞳…どうしてそんな所で聞いてるの。早くこれからに来たうどいつ? 真冬なんだから、廊下は寒いでしょ?」

「なんだ…バレてたのか。」

輝瞳は、一人が話しているのを廊下でこっそり聞いていた。

「変な子ね…。やつは…わざと貴方、なぜ様子がおかしかったの？」

「えつー別に…なんでもないよ。朝は顔を洗つのは当然だろ？」「

僕、嘘付くの苦手なんだって…。

泣いてた、なんて言えないし。

「あのねえ。今、何時だと思つてる？深夜3時よ。貴方いつも寝坊して、あたしより起きるの遅いじゃない？」

完全に怪しまれてる。

「田が開こうやつて。本当になんでもないからな。」

「輝瞳も天空も、さつきからなんか変よ。あたしに隠し事はしないつて、小さこ頃からの約束でしょ？」

「その約束を覚えてるなら、そのまま美月に返すよ。」

「どうこのひで意味よ。」

良かった。まだ美月のままだ。

「美月も隠し事は、ダメってこと。言いたいことは、言わなきゃ。じゃあ、僕も行こうかな。」

「どうへ？」

「ちょっとね……気分転換にプログラミングへへる。」

「ほんとね……やつぱり変ー！」

すでに輝瞳は、支度を済ませていた。

「ねえ、美月。前から言いたかったけど……僕も美月が大切な人だよ。」

「口上と笑った輝瞳は、そう言い残して、静かに姿を消した。

「はあ……。」

なんか、よくわからないけど、一人の言葉に安心したあたし。

「なんかもう、眠れないよ……。」

「ううじて地上界の夜が明けていった。

神楽学園高等学校（前書き）

藤真 天空とうま かなたは、実は学校の先生でした。

夜が明けるまでの天空サイドの様子です。

新たな敵も登場…？

「藤真先生。最近働きすぎです。深夜の給料は入りませんからね。」

天空は自分の屋敷を出て、美月が通う神樂学園かぐくにいた。

「……明日の授業のプリントを作らなきゃならならないので。お気になさりす。」

同僚の言葉に少しムカつきながらも、黙々と仕事をこなしていく。

「それはお疲様ですねえ。そう言えば、あの天才美少女はどうなつたんでしょうね？」

「……はい？ 天才美少女って誰ですか。」

随分いいあだ名だな…しかし、美少女なんてウチの学園にいたっけか。

「なんだ、知らないんですか。貴方が毎回気にしてる、うちの学園の生徒……風舞美月のことですよ。最近、貴方との仲を噂されているようですが。」

同僚の言葉に動搖し、作成中のプリントが破けてしまった。

「うわ…最悪だ。もうすぐで仕上げだったのに……。」

「何か心当たりでも？貴方は教師、彼女は生徒ですが？」

「いや、なんでもありませんって…。第一なんで俺が噂に…？」

「聞かない方が良かつたか…？」

まさか、さつきまで一緒だったのがバレたのか。

「いえ。貴方は生徒にイケメン先生と言われているので。それと、最近話題の絶えない風舞さんをくつ付けてみただけです。

いわゆる、妬みといひやつです。」

バレてなかつたのか…。

驚かせんなよ、ブサイク先生。

「……まあ、あまり彼女を自宅に連れていいことですね。誰かに見られでもしたら貴方破滅です。」

つて……バレたのかよ！

「あの、吉崎先生……？」

「さっき見かけたもので。もし貴方が僕を怒らせるやつな」とがわれば、即ばらしますので。」

「…………。」

唚然とする天空。

「あ、…………天才美少女って言つのは、一体どうやって付いたんでしょうね～……。」

話題変えるしかない……だけどまた美月の話じゃ意味ないだろ俺！

「上層部から噂が伝わってこっちまで来たんです。彼女が月騎士のエリート一家に生まれた血筋つてことが一つ目の理由。もう一つは、僕達が教えるすべての教科がパーフェクトにこなせることが由来だそうで。」

美少女は、ただ単純に見たままと言っていますが。「

なるほど……。

「しかし、朝方の仮実習は、珍しく失敗したようですが。」

「仮実習か……。」

上層部。何を考えているんだ。

「地上界上層部がお見えになつた時は、驚きました。上層部が授業を見学するなど、異例ですからね。」

「ああ。そして、クローン人間を相手に、上層部は実力を見せつけようとしたせていた。」

その時まで、何も知らなかつた。

美月がクローン人間で訓練をさせられていたことに。

「しかし、疑問ですね。僕達の仕事は、人間達の長い人生に関わって運命を導かせること。一日で終わるはずがない。」

「俺もそう思いました。けど、後で上層部に聞いた所、そのクローン人間は、人生が一ヶ月で終わるようになつて造られていたそうです。

随分と、雑なやり方でしょ?」

彼らは、風舞の能力を向上させようなんて、本当に思つていてるのでしょうかね……。」「

「か月前……。」

「風舞美月、お前に新たな訓練材料を与える。」

ここは、地上界上層部基地。

地上界の半分を占めると言われ、巨大な敷地を誇る。

「新たな材料……?」

美月の目の前に現れたのは、一人の少女。

「これはクローン人間だ。我々がお前のために造ったものだ。普通の人間と違うのは、寿命が一ヶ月ということ。

そして、将来、お前が担当する人間のクローンだ。」

そのクローン人間は、幸せに、何も不自由が無い生活を送ってきた少女だった。

「風舞美月は、僕達の目の前で、そのクローン人間を殺めようとした。未遂で終わってよかったですね。」

「正直ショックでした……クローン人間の寿命があの時ちょうど尽きる頃だったみたいで。

風舞は最期に首を絞めようとした。

「いくら運命を左右出来る俺達でも、人間を殺めることは、ルール違反だ。

「でも、あんまり手に力が入ってなかつたみたいで、大丈夫でした

ね。上層部の一部は、自分達が育てている兵器をお披露する予定だつたのでしょうか。」「

「焦っていましたね。」

美月が首を締めた時、俺は何も言えず、ただ立ち尽くしていた。

無表情で殺そいつである美月に、衝撃を受けたのは事実。

俺は、今まで美月と生きたすべてが壊れてしまつようで怖かった。

本当は、美月と輝瞳が人間界に行くところを見ていたが、あえて止めなかつた。

「藤真先生、吉崎先生。夜遅くまでお疲れ様です。お茶を持ってきましたよ。」

天空が悩んでいると、田の前に学園の教師の中でも際立つて美しいと評判の若い教師がやって來た。

「わざわざ、ありがとうございます。」

「すみません。」

「ところで藤真先生、今担当している人間の少女はどうなの？」

「

「病気が進行してまして。寿命を延ばすか考え中つてところですかね。」

「さすがは現在ナンバー1の月騎士ですね。寿命を延ばすなんて技術が必要ですもの。

でも、さぞかしいい子なんでしょうね。

月騎士にそこまでさせるなんて。」

確かに性格は悪くない…。そうだ、いい考えが思いついた。

「風舞美月の担当の人間が決まるのは、いつかわかりますか？」

「ええ。確か…あと一週間後ですよ。」

女教師は、持っていた個人情報資料に目を通して答えた。

彼女は、美月の担任である。

「ちよつといかもな……ありがとう。」

上層部に駆け寄つてみるか。

「藤真先生……今、何を考えているのか、当てて差し上げましょうか。」

女教師は、何故か面白そつこしてくる。

「風舞美月のことをおまり気になさらない方が宜しいかと。周りの人には誤解されますわ。」

天空が前から美月を気にかけていることは、先生達もよく知つていた。

「生徒が困つてるんです。なるべく気を付けます。」

「ふふっ……では、失礼します。」

「…………あの女には、気を付けた方がいいでしょう。」

それから今まで黙つて聞いていた吉崎先生が口を挟んだ。

「なぜですか？」

「いえ……別に。」

特に聞かなくともいいと思った天空は、上層部に向かった。

美月、お前を助ける方法を見つけたかもしれない。

朝日が眩しく地上界を照らし始めていた。

「どうだ……様子は？」

「ええ。万事、うまく行つておりますわ。」

新たな闇がすぐそこまで来ていることなど、天空は知るよしもなかつた。

メイドと美月の記憶（前書き）

天空かなたと、輝瞳きらとがいなくなつて、屋敷に残された美月。

それから美月が学園に行く時間までのことです。

メイドが登場します。

彼女の名前は、花蘭からん。

意外と美人。無表情だけど、結構強い。

メイドと美月の記憶

まだ夜が明けたばかりの地上界。

美月は、屋敷の屋根の上に座り、街を眺めていた。

「美月様、紅茶をお持ちいたしました。」

その声に振り向くと、さつきのメイドがまた無表情で立っていた。

「どうせ……といひで貴女。もつ少し、笑顔になれないものかしら？」

首を傾げるメイド。

「それは……」命令でしょうか？

「何それ。命令じやなきや、やらなこつてことね。

「さうよ。貴女は、お密れんこの屋敷をよく見せなきやならぬ仕事があるでしょ。

メイドが無愛想じや、印象が悪くなるつて言つてゐるのー！わかつた？」

メイドの発言に少々ムカついて、つい怒り口調になつてしまつた。

「理解しました。では、やつせただきます。」

…… || ハシ

「ぐべ」メイドは満面の笑みを浮かべ、美冴を見ている。

「わらわら。やれば出来るじゃなこ。」

美冴は、紅茶を飲みながら暫くボオー…とじていた。

「うーん…そりゃあ、やつきから物音がしないわね？あのメイドはめいじ

「うわあーーー！」

まだ笑つてたの…！？

メイドは美月の「命令通りに」ずっと笑みを浮かべ続けていた。

美月が止めない限り、永遠に続きそうだった。

「信じられない！貴女は、本当に命令通りにしか出来ないの……？」

「はい。以前、ご主人様にも同じ様なことを言われた覚えがあります。」

「はい……？いや、もう笑うのは止めていいわよ。命令よ、命令。」

「かし！」まつました。』

天空様が十五歳になられた頃。

「おい、ちょっとといいか？」

「はい。何かご用でいらっしゃいましょうか？」

当時の藤真家は、天空様のお父上である、藤真光夜様とうまこうやが当主でございました。

「前から言いたかったんだけど、なんであんたはそんなに無表情なんだ？もう少し笑え。」

「それは……」命令でしうか……？」

天空様は、先程の美月様のように非常に不可解な表情をしておりました。

「違う。笑った方があんたのためにも、いって言つてるんだ。」

「天空。…余計なことを言つたな。」

「お父様……。」

私から見てお二人は、考え方も性格も正反対の方でした。

「またお前が下らない発言をする」と、藤真家の名が廃れるだろ
う。」

光夜様は、当時の地上界で有力者と呼ばれる存在がありました。

また、藤真家は、代々地上界上層部に身を置く、エリート一族。

「お父様…貴方の月騎士を育てるための教育方針…どうかと思いま
すね。

屋敷の奴らまで、洗脳させてしまつ。

俺は、すべてが悪の貴方が嫌いだ。」

「天空、お前はここに生まれるべき子ではなかつたのかもしれんな。

」

「どうこう意味だ。」

「そのままだよ。」

考え方がまるで違つお二人は、天空様が幼い頃からいつも対立をしておりました。

「何、突つ立つているんだ、お前は。仕事に戻れ。」

「申し訳ございません。失礼致します。」

「天空がそんなことを…。」

「はい。」

「で、貴女は、結局笑えないのね。」

「話には、まだ続きがございます。」

私が洗濯を終え、仕事が一段落ついたところ。

「あ…………」

ちょうど、廊下で天空様とすれ違ったのです。

「何かご用でござるでしょうか？」

「紅茶が飲みたい。」

「かしこまりました。」

「それと、もうひとつ命令だ。……カップを追加で。アンタも休憩
しよう。」

いつものようにニコッと笑って、おっしゃいました。

「かしこまりました。」

私は、ご命令通りティーカップを一つ用意し、お庭で天空様とお話を致しました。

「」の間は悪かつたな。父親とはうまくこななくて。……ってアンタに言つても仕方ないか。」

「いいえ。理解しました。」

「アンタは、あの父親をどう想ひます？」

「光夜様は、私や、私の周りの者に、よく似ております。ですから、私も光夜様の考え方は納得でござります。」

「……そつか。アンタもあの男に支配されているんだな。」

私は、その言葉の意味が未だに理解出来ません。

「ですが……一つだけ言えるのは、天空様は、藤真家の誰とも……いえ、地上界で生きる者の誰とも違うところです。」

「なるほど……そつこつ違ひは感じ取れるのか。」

天空様は、探るように私に何度も質問を投げ掛けてきました。

「…くそ、なかなか笑わないな、アンタ。」

「一つ、よろしいでしょつか？」

「なんだよ？」

私から他人に質問するなど、生まれて初めてでした。

ですが、私を一生懸命に笑わせようと意図を知りたかったのです。

「私は、笑うことが出来ませんが、人間は笑うと聞いたことがあります。なぜですか？」

天空様は、一瞬驚いた顔をなさいましたが、私の質問に丁寧に教えてくれました。

「…人間は、心を持つているからだよ。」

「心……」

「 もう。 環境の変化によつて、心が感じとるんだ。 楽しい、嬉しいつて。だから、自然と笑える。笑顔は、人を喜ばすことじだつてできる。」

他にも、色んな心があるんだ。悲しい、悔しい、苦しい……。」

「 それ、騒がしくありませんか……？」

天空様は、一瞬話すのをお止めになりました。

「 地上界の奴らはその心を持つていない。」

それは、とても悲しいことなんだ。」

この地上界に生まれてくると、心を持たないで生まれてくるらしい……俺も詳しくは知らないが。」

「 しかし……何かをしても、何も感じることが無いなんて……生きてる意味なんてあるのかな……。」

ポツリとおっしゃる天空様は、今まで見たことがない顔をしておりました。

「 私は、いつもして屋敷で働く使命があり、それが生きる意味だと思

つてあります。

「…天空様は、その人間のような心をお持ちなのですね。私が天空様は皆と違つて感じていたのは、それでしたか。」

天空様は、何も語りませんでした。

「今のお顔は、どのよつな心の表れなのですか?」

「…………。」これは、悲しみの顔。花がしほんと枯れたよつな感じ…
つて言つたらわかりやすい?」

「花が枯れると、私は抜いて捨てます。」

「…………ダメだ…」りや。」

「それから、何度も笑う練習を致しましたが、人間のよつて、うまく笑えませんでした。」

「いや……笑つひて、練習して出来るものじやないのよ。」

呆れたような顔をする美月。

「でも、あたしも貴女と同じ様になるかもしれないわ。」

走つて、走つて逃げ続けた。

「お帰り、美月。今日はなかなか早かったな。」

クスクス笑う天空は、屋敷の玄関のドアに寄りかかって、立つていた。

「……お、お帰りつて、ほんあたしの家じゃないし!」

「でもお前、毎日のようにここに来るだろ? すっかり馴染んじゃつてな。そんなに俺が好きか?」

「違うわよー。ただ紅茶が美味しいからー。」

本当は、すごく嬉しかった。

天空がいてくれて……すごく安心して。屋敷に入つたら、天空が敵から守ってくれる気がした。

「おいで、もう用意してあるから。」

その時……

ガオ……グルル……

振り返ると、何匹もの狼が屋敷を囲っていた。

「きやあーー！」

「花蘭！屋敷の者を呼べ！」

天空がメイドに言つと屋敷のすべての使用人達が出てきて、武器を

構えた。

「ククク……藤真家の『子息が、風舞家の娘を隠していたとは……。」

一匹の狼が獲物を見つけたかのように美月に近付いて来る。

天空は、美月を素早く自分の元に隠した。

「こくら上層部である以上とも、ここから先は我が藤真家の領域。入る』ことは許さない。」

「しかし、風舞美月は、我々の訓練を抜け出してきた。処罰を『えなけばならない。大人しく、こっちへ来るんだ!!」

「いいが、お前達。絶対に屋敷に入れるな！」

「行け！殺しても構わない！」

ガオ…………！

「早く、屋敷へ。」

ガンガンと武器を鳴らす音が聞こえる。

屋敷に入つたあたしは、放心状態だった。

「大丈夫か？」

天空はそんなあたしを不安げに見た。

「あたし……やつぱり戻ろうかな……。」

「どうして？」

「だって！屋敷の人達が危ないよ！それに、天空にも迷惑が…。上層部に殺されちゃうかもしれない！」

うつ向いたあたしに、近寄る天空。

「安心しろ美月。あいつらは絶対死ない。エリート一家の藤真家

が雇つて いるんだからな。

俺は、大丈夫だ。

……それにお前、抜け出してきて偉いじゃないか。』

「は……？」

予想外の言葉を受け、美月は驚いた。

天空は、美月の頭を撫でてこう言った。

「自分の考へでここに来たんだろ？ 嫌だつて思つたんだよな。それでいいんだよ。』

「どうこう」と？』

「誰かの命令をただ聞いてるだけじゃなくて、自分で考へて行動すること。人間の人生を動かす俺達には、大切なことだろ？

それに、お前は元々、誰よりも頑張り屋だから、サボつてもサボつ

た分、また頑張るよな?」

「……それに、まだ心が残ってる唯一の証拠だから。」

天空は、悲しそうな顔をしていた。

「天空様、処理が終わりました。」

そこには、花蘭と呼ばれていたメイドが立っていた。

「お疲れ。どうだった?」

「自分達の命を守つて逃げていきました。」

「だと思った…。」

「あの、ありがとうございました!」

その後、両親が迎えに来るまで天空と一緒にいた。

「でも、後に天空のお父様から言われたの。

息子はお前のために、時間があるフリをしているだけだ。毎日毎日、お前に構つていられない程、たくさんの仕事を抱えている。

昨日の事は、どれだけ恥をかかされたか。だから、我が家に近寄るな。…………つて。

「そうでしたか。」

「だから、あたしあれからここへ来なかつたでしょ。」

「はい。」

「貴女の様に無感情になる口も遠くないわ。

「もつあまり記憶も無いから……。」

「美月様、そろそろ学園へ行く時間でござります。」

辺りはすっかり明るくなつていた。

「そうね。あ、今まで話したことは秘密よ。……命令です。」

「かしこまりました。では、車を用意致して参ります。」

一人きりになる美月。

どうか、思い出が消えませんように。

屋根の上に立ち、日に照らされた街を見ながら、そう願つたのだった。

秘密の部屋で（前書き）

朝になつた地上界。

天空^{かみな}は、学校が始まる前に、上層部にある提案を持つていきます。

上層部の現リーダー、桐谷海斗^{きりたに かいと}。

神楽学園の怪しい女教師、小夜^{よしの}さよ。

天空の決断は果たして…。

秘密の部屋で

「……相変わらず、嫌な雰囲気だ。」

ここは地上界上層部が拠点を置く城。

この巨大かつ豪華な建物の中で、上層部の者達は働いている。

城の周りには、警備係の男達が規則正しくロボットのよじこ並んでいる。

天空は、大きな扉の前にいた。

サツ

「藤真天空様ですね？上層部の方々がお待ちになつております。」

案内係なのか、急に目の前に現れた女。

「ああ……。さすが、上層部。俺が来るのもお見通しか。」

女がパンツと手を鳴らすと、大きな扉が音を立て、開いた。

城に入り、長く細い廊下を通り抜ける。

「これはこれは…。天空様。」

廊下を歩く、すべての者が天空を見て、お辞儀をする。

「うわ、うわ、うわ…。」

数々の部屋の中で、ある部屋に案内された。

「「」苦労様。この間は、104号室だったのに…また変わったんだな。」

「申し訳ございません。殺人未遂があつたもので。

どうやら今回は、上層部の秘密の部屋を知られてしまつたようです。

「

「外部に秘密の部屋の場所が漏れるなんて有り得るのか?」

上層部の者は、地位や名誉、富、すべてを持ち合わせている。

一般人にしてみれば、羨ましい限りなのだろう。

過去に妬みから、殺された者がいた。

その頃から、上層部の部屋は秘密として、関係者以外は入れない仕組みにしていた。

「セキュリティは万全でした。内部の者の犯行とみて調査中です。」

内部…ねえ。

「そうか…。もう戻つていいぞ。」

「では、失礼致します。」

女は一瞬で消えた。

何号室か書いていない部屋。

天空は、ゆっくりその部屋に入った。

「あつ！天空君。久しぶり～。」

目の前に現れたのは、優雅に椅子に腰かける男。

書斎には鶯が一匹、見張りなのだろうか。

男の隣には、眼鏡を掛けた暗そうな女秘書が立っている。

「お久しぶりです。今日は頼みがあつて、ここにきました。」

「へえ…。君の言いたいことは、よくわかっているよ。まあ、座つて座つて～。」

「イツ、いつも変なしゃべり方だよな。

「いえ。時間が無いので、ここで結構です。」

「ん？ あ、 天空君は、 神楽学園の先生だったよね？ 君のお父さんと同じだ～。」

男の名前は、 桐谷海斗。
きりたに かいと

俺の父の友人で、 かつては地上界のトップトッピングに君臨した男だ。

時間が無いって言つてるだろ。

「そんなこと、 どうだつていいんです。」

「君をずっと見ていると、 光夜君を思い出すんだよねえ～。」

天空は何も言わず、 桐谷を睨んだ。

「僕が上層部のトップになつたこと、 お祝いしてくれないの？」

「おめでとうございます。」

無表情で言つ天空。

「ハハツ。まあ、いいよ。

君が言いたいことは、風舞美月のことだひつゝいいよいよ。認めてあげても〜。」

「また勝手に俺の考えを読んだのですね。」

「うん。この能力は便利だよ。」

「プライバシーだろ！

「プライバシーだる。ククツ。」

「……。」

「ククツ…『めん』『めん』もう使わないよ。」

要は、自分は月騎士を引退するから、君の担当している人間を途中から彼女に託したいと？」

「ええ…。その通りです。今担当している人間を最後に…。」

「驚いたなー。まだ若いのに引退だなんてえ。どうしてー？」

「人間を担当してては、十分にやりたいことが出来ないと思いま
して。」

「ふう〜ん。でも、どうして風舞美月に？」

桐谷は興味深そうに天空を見た。

「…風舞美月は、俺の生徒です。最近、彼女は成績が良くない。
週間後に実戦では、失敗する可能性が高い。」

今担当している人間は、俺がすべて把握しています。ですから、風
舞美月に任せ、例え失敗しそうになつても、適切なアドバイスが出
来る。そう思いました。」

「成る程ねえ…。だけど、天空君つて、随分と彼女を特別扱いして
いるよね。」

「…………。」

「実戦は、彼女だけじゃない。周りのお友達もそろそろ実戦の時期。風舞美月だけといつのはどうかな?」

天空はフフッと笑った。

「優秀だった者が急に落ちぶれると、教師は困惑のなんですね。」

「ククク。僕は教師じゃないからわからないけど……まあ、いいよ。」

「ありがとうございます。」

良かつた……。

「ただし。一つだけ条件があるよ。」

桐谷は、急に真剣になった。

それから数分後

「でえ？君はいつ引退しようつとっ？」

天空は腕まで捲られたシャツを下げる。

「彼女にバトンタッチした時に。」

「そ。了解）。さ ちゃん！これ、ようじくつ。」

そう言って秘書に契約書を渡す桐谷。

「では、失礼します。」

天空は早く帰りたいと思っていた。

「あー待って。忠告があるよお。」

なんだよ。

「君が月騎士を辞めたと正式に認められたら、もう人間界は立ち入り禁止だよ。」

「え……？」

「わかるよね……？地上界の者は、理由なく人間界をうろついてはいけないルールがあるでしょー？」

「ああ。…わかりました。」

「じゃあね～。天・空・君。」

ギギ … バタン。

「疲れた……。これでいいんだよな。」

バサツバサツ

鷲が羽を広げ、桐谷の肩に乗った。

「ふふっ…。酷いのねえ。桐谷さん。」

秘書は、黒い渦を巻いている。

「君もおんなじ。さてよちやん。」

現れたのは、神楽学園の女教師…

「楽しみね。あの先生が墮ちていく所を見るの。」

「ああ。ゆづくつと苦しみを堪能するといい。」

「やっぱ…授業だ。」

美月、お前なら大丈夫さ。

「約束守れなくじめん。」

隠し事は無しだよっ！

約束。指切りしよう。

うん！約束ね！天空。

腕に刻まれた契約印を押さえながら、天空は城を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6329y/>

美しい月の夜に…。

2011年11月27日16時53分発行